

ウクライナのナチズムを理解するために

Lucas Leiroz de Almeida

February 25, 2022, Global Research

西洋では、各種メディアが、ロシアの、ウクライナを「脱ナチ化」しようとするアジェンダには根拠がないと言っている。それと同時に、西洋諸国の一般的見方は、ウクライナの現実とは完全にかき離れていて、主流メディアによって報道されることだけを、信じようとしている。その結果、現在のウクライナには、ナチズムの痕跡もないという、ウソに基づいて、ロシアのやり方を強く否定する態度が生まれる。この意味で、急ぎ要求されるのは、質のよい情報が西洋の聴衆に広く伝えられ、ウクライナの現実に関して、ウソで固めるようなことが起こらないようにすることである。

西洋のほとんどすべての、TV チャンネルと新聞において、ウクライナのナチズムは、考えられる最悪の議論によって進められている：— ゼレンスキーはユダヤ人で、ウクライナは民主主義の国だ、など。この種の浅薄な考えは、マイダン広場以来のキエフの、破局的な事情の詳細な分析を妨げている。あのとき、あるクーデタによって、ある反ロシアの暫定政府が権力を握り、人種差別と、反ロシアのイデオロギーを制度化するようになり、それが今日までずっと続いているのである。

我々が「ウクライナのナチズム」という場合、我々はキエフが、ヒトラーのベルリンの現代版だと言っているのではない。そうでなく、ネオ・ナチの要素が、2014年から後のウクライナの、基本的なポイントだということである。マイダン広場のクーデタは、NATO によって公然と支援され、財政援助されていたが、それはモスクワ自体の戦略的環境の中での、ロシアのどんな影響も、転覆させる方法としてであった。その目的は、ウクライナを傀儡国家にし、ワシントンの命令で動かし、ロシアとのどんな繋がりも断ち切ることだった。そこには、キエフとモスクワ間の、政治的、経済的、また外交的な関係を、廃絶させる目標があっただけでなく、両国間の文化的、民族的、宗教的、かつ言語の絆をも、なくする目標があった。

それ以来、反ロシア的計画がずっと実行されてきた。民族的ロシア人は、過去8年間、迫害され続けた——ある地域では組織的な、人種絶滅の方法が取られた。ロシア語は、ウクライナ語を話さない人々の全都市で、犯罪化された。ギリシャ正教の分裂は、モスクワ家父長制から、ウクライナ「国民教会」を作り出すために、支持されてきた。しかし問題が

残る：——もしウクライナ人とロシア人が、こんなに近しい間柄なら、どうしてこれが可能だったのだろうか？ 多くのウクライナ人がロシア語を話し、民族的ロシア人と結婚している。しかも、この国の人口のほとんどが、ギリシャ正教に従っているのだ。ではこのような、うまくいった人種差別政策が、どうして可能だったのか？

これは確かに、マイダンの計画者たちの最大の関心の一つだった。その答えはナチの要素にあった。そしてそれは、ポロシェンコ政府時代の内務大臣、Arsen Avakov によって非常にうまく解決された。アヴァコフは、マイダンを支持していたネオ・ナチを利用する方法を考え出し、これら過激グループを、新しいマイダン体制の防御のキーポイントにした。西洋では、スラブの歴史については集団的に無知であるために、多くの人々がナチの人種差別は、ユダヤ人に限られたものと考えているが、実は、反ロシアの憎しみが、第2次大戦を動かした最大の力の一つになっていて、それがヒトラーを反理性的な決断へと導き、彼は侵略によって、ソ連邦を併合しようとした。この感情が、これらネオ・ナチ軍団に生きていて、彼らはロシア人を殺しつくすためなら、文字通り何でもしようと考えている。彼らは人種的な確信において、ウクライナの軍隊より、もっと狂信的なのだ。

Azov Battalion (アゾフ大隊)、C14、それに右翼の武装集団 Pravyi Sektor、Svoboda のようなグループは、ウクライナ内部で自由に活動し、ドンバスの民族的ロシア人の全滅に、最も力を入れた者たちである。これらのグループは、より暴力的で、ウクライナの正規軍よりもっと進んだ装備を用いている。彼らはキエフの、反ロシア的残虐の表看板となっている。ネオ・ナチとして、これらの軍団は、ロシア人とウクライナ人の間のどんな絆でも破壊するという、政府の目標に、何の抵抗も感じていない。だから彼らは、マイダン(クーデタ)時代の主たる盟友になっている。

2020年のFreedom House(国際NGO)の報告「ある新しいユーラシア極右の蜂起」には、今日、ウクライナ社会では、極右(far right)が、最強で、最も勢力をもつ要素の一つで、進んだ武装をした、高度に専門化され、顕著に政治的な勢力だと言っている。言い換えると、この地上の別の場所で、暴力的で犯罪的な集団であり得た者たちが、キエフによって、親マイダンの、並行的な武装勢力に転換された、ということである。この種の行動を勢いづかせるものは、元々のナチズムからきている。すなわち、Schutzstaffel(SS)は、1930年代と40年代に、最も大きなドイツの武装政治勢力だったが、この集団は「ドイツ武装軍」の一部ではなく、正規軍から切り離され、政府によって準備された、民間警察のようなものだった。

ここには大きな戦略的な目標があった。すなわち、ドイツ軍は政府によって命令されたが、SSはナチ党のため、ヒトラーのために戦った。すなわち、もしドイツが降伏したら、SS隊がドイツ軍に宣戦布告することになっていた。この種の「二重の盾をもつ」軍事システム

は、キエフが実行しているものと同じである：— もし、ある日、親ロシア政府が選ばれたなら、ネオ・ナチ軍団がキエフに対して宣戦を布告する。そしてそれは、正規軍を打ち破るほど強く、SS隊がドイツ軍より強いのと、それは同じだった。

こうした集団は、軍事力の面で活動するだけでなく、文化的な面でも、普通のウクライナ人の間で、反ロシアの憎しみを醸成するものだった。シュテファン・バンデラ（ウクライナの反ソビエト・ナショナリスト指導者で、ナチス・ドイツと協力した）は、こうした徴候の一つである。マイダン事変の前は、バンデラは、他のウクライナの歴史と同じような名前だったが、ネオ・ナチスや反ロシア政治家によって、国家的英雄として記憶され、尊敬されるようになった。同じ意味で、これらの集団は、ロシア正教会の教区や寺院に対し野蛮な振舞いをし、ロシアに完全に敵対するウクライナ人の精神性を、強化したといえることができる。それは次第に、地方人口にまで浸透しつつある。

ウクライナは実は、一人のユダヤ人に支配されており、この国の権力構造は、内部的に権威主義的で腐敗しているにもかかわらず、実は公的には「民主的」なのだ。しかしナチの要素はそういう様相を取らず、マイダン後のウクライナの状態を、保護する構造をとっている。それは、ネオ・ナチ軍団の国家的連携に支えられており、その目標は、キエフの権力者が誰だろうと、ひたすらロシア人を迫害し、殺すことである。これらの軍団にとって、共和国の大統領がユダヤ人であるかどうかは、どうでもよい。大事なことはロシア人が死ぬことで、これはネオ・ナチスにも、彼らが保護する親 NATO 政治家にも、利益になるのである。言い換えると、西洋のメディアが、ウクライナのナチズムについて、プーチンの主張を否定する議論は、弱く、浅薄なものなのだ。

モスクワが、ウクライナを「脱ナチ化」しようとするのは正しい。それはいくつかの国家が連携して取るべき手段である。世界中でナチズムが「非難されている」が、それは西洋を利する場合だけである。現代においてナチズムが、最も政治的経験に接近した場合でも、それは人権と民主主義を弁護するリベラルな政府が、それを見て、平和的にこれを許しただけだった。ロシアはこれ以上、ネオ・ナチスによって、彼らの人民への犯罪が行われることに耐えるつもりはない。そしてその決断は、全く間違っていない。

[訳者 Grewatchain 注]

これは読みやすく、わかりやすい。これによって、今、ウクライナとロシアに間で起きていることを、我々のほとんどが、正しく理解していなかったことがわかった。これを読んで「ロシアが悪い」の一方的な合唱は、少しは減るであろう。我々の誤解や無知がいろいろあった。まず、ウクライナが少なくとも8年前から、ずっと異常な状態（ク

ーデータ)にあったことを知らねばならない。この国は、歴史も事情も知らない人が考えるような、平和な民主国家で、すべての人が平等に市民権を得て暮らしているのではなかった。恐ろしいことが行われていた。「ネオ・ナチス」と呼ばれる、想像を絶する残虐な連中がいて、彼らはここで読む限り、数年前までよく見た「イスラム国」の集団に近いと思われる。どちらにしても、この者たちを利用しているのは米と英である(ジョン・ピルジャー論文を見よ)。

我々は「イスラム国 (ISIS)」の暴挙を見て、彼らを掃討するのに同情を覚えることがほとんどないように、このウクライナという土地に巣食うネオ・ナチの掃討に、同情を覚えることは、ほとんどないと思われる。もちろん戦争は早くやめてほしい。しかし、プーチン氏のロシア軍のやっていることの意味と、それがいかに必要かは、これで了解できると思う。これは本当は、ロシアとウクライナの内部事情であって、世界的に臨時ニュースを流すようなことではない。

この戦争の内容が特別のものであるのは、ゼレンスキー・ウクライナ大統領の言動からわかる。彼は、自分は何も言えないと言い、これはロシア人の皆さんが決めることだと言っている。つい今し方のニュースでは、バイデンが彼に、「(戦場から) 非難させてやろうか」と言ったら、彼は、「それは結構、私は車でなく、弾薬が必要だ」と言ったという。<https://www.infowars.com/posts/ukraine-president-volodymyr-zelensky-rejects-us-offer-of-evacuation-saying-he-needs-ammunition-not-a-ride/>

とにかく、よく事情を調べもしないで、プーチン氏を一方的に断罪するようなことはやめた方がいい。この世界を大きく見誤ることになる。このよくできた論文を読んだ上で、発言すべきである。